

ROSSI 四季報

R
RITSUMEIKAN

2009年3月
第44号

Research Organization of Social Sciences (立命館大学BKC社系研究機構)

CONTENTS

〈巻頭言〉

「現代経済分析の視点—新しい経済学を求めて—」シンポジウムの開催	岩田 勝雄 …………… 1
国際貿易、貿易政策と不法移民に関する一般均衡モデルの構築	吉田 千里 …………… 2
“Rits Business School Research Seminar in English” —英語による研究成果の発信・受信—	樋原 伸彦 …………… 3
第一回モナシュ・立命館シンポジウム	原 啓介 …………… 4

巻頭言

立命館大学 社会システム研究所
所長 岩田 勝雄

「現代経済分析の視点—新しい経済学を求めて—」シンポジウムの開催

2007年の「サブプライムローン」問題に端を発した「金融危機」は、リーマンブラザーズ社の倒産によって世界的な規模で拡大し、アメリカ、ヨーロッパ、日本などの発達した資本主義諸国経済に不況という深刻な事態をもたらしている。「金融危機」が発生する原因をつくった20世紀経済は、恐慌、貧困、飢餓、戦争、環境破壊などこれまで人類が経験したことがない多様な困難に直面した。21世紀経済も多様な問題を克服できないまま「金融危機」を迎えたのである。

経済学は、アダム・スミス以来人間の「幸福」の達成を求めたのであった。古典派経済学、マルクス主義経済学、新古典派経済学、そしてケインズ経済学は、新しい「経済人類史」を築くために経済学の体系を求めて理論・政策（応用）を試みてきた。18世紀以来の資本主義の歴史は、経済学体系・理論の実践でもあった。さらに種々な経済学体系は、現実の課題に応えるべき内容の精査も進めてきた。しかし今日の複雑・多様化した経済現象は、既存の経済学理論体系においても解決不能な状況を示しているのである。

資本主義の歴史は恐慌の回避、貧困の解消、安定的な経済成長を求めてきた。しかし1825年イギリスに始まる恐慌の歴史は、1873年「大不況」、1929年「世界恐慌」、そして1974—75年恐慌を経験した。1825年を除けばいずれも長期にわたる恐慌であり、資本主義システムの大きな転換点となった。1873年「大不況」の後は、いわゆる「帝国主義」の時代となり、アジア、アフリカ地域の植民地獲得・支配が完了する。「帝国主義」体制の下での先進資本主義諸国は、やがて第1次世界大戦を引き起こしていく。1929年「世界恐慌」は、アメリカの金融・証券市場の混乱を通じて全世界に波及していく。これまで資本主義が経験したことのない未曾有の激烈な恐慌であった。恐慌を契機としてアメリカでは「管理通貨」体制が採用され、国家・政府による経済システムへの大規模介入が進展する。さらに1974—75年恐慌は、石油ショックを契機としたものであり、アメリカの国際的ドル流通が拡大していく。経済政策では、ケインズ政策が後退し、新古典派経済学政策が主流となっていった。

今日の経済学は新古典派経済学が主流になっているとはいえ、他の経済学体系が衰退しているのではない。それぞれの経済学体系は、現実の資本主義社会への対応、

政策を模索してきた。同時にそれぞれの経済学体系は、他の経済学体系の批判を通じて理論的あるいは実践的な課題に迫っていったのである。経済学の歴史は、種々な経済学体系の存在がはじめて精緻化していくことが可能であった。

今日、改めて経済学の課題とは何かを議論していく重要性が増している。それは主流派経済学のみならず、ケインズ経済学、マルクス経済学あるいはその他の経済学理論体系などの全面的な見直し、あるいは再評価である。

社会システム研究所は、2008年11月に立命館大学で「現代経済分析の視点」と題したシンポジウムを開催した。シンポジウムの目的は、経済学の学問体系全般をとらえ直すとともに改めて経済学の根本問題とは何かを探ることである。さらにシンポジウムは、経済学「学派間」の議論を通して現代経済の特徴を明らかにするとともに、今日における経済学の課題をより鮮明にすることを目的とし、あわせてシンポジウムを通じて経済学研究の高度化と内外の経済学研究者に発信できることを期待してである。

シンポジウムは報告者に萩原伸次郎（横浜国立大学経済学教授）、後藤玲子（立命館大学先端総合学術研究科教授）の2氏および討論者として角田修一（立命館大学経済学部教授）、平田純一（立命館大学経済学部教授）の2氏、司会は岩田が担当した。

「現代経済分析の視点—新しい経済学を求めて」と題するシンポジウムは4氏の報告をえて、次の三つの論点を中心にして討論を行った。第1の論点は、2008年に生じたアメリカ「金融危機」の位置づけについてである。1929年「世界恐慌」に匹敵するともいわれる今次の「危機」をどのように捉えるかの問題である。第2の論点は、現代の資本主義システムに関してである。とりわけ現代資本主義システムのもつダイナミズムあるいは最大の優位性をどのように捉えるかである。同時に現代資本主義システムの最大の弱点とは何か、またその弱点を克服可能かという現代資本主義評価の点である。第3に、既存の経済学の評価をふまえて新しい経済学体系の構築が必要であるかどうかである。

4氏の報告内容および討論については、『社会システム研究』第18号掲載の論文を参照願いたい。